



パートナーシップを軸にした ドイツと日本の 新しい関係づくりが必要だ

法学・医学・哲学など古くからドイツと日本には深い友好関係があった。ところが、「最近では、日本とドイツの関係の相対的な位置付けは低下してきている」と危惧するデア大使。ドイツ駐在経験のある亀崎審議委員と、歴史、教育、環境問題、国際関係……などを話し合っているうちに一つの処方せんが浮かび上がってきた。それは、「現代ドイツ、現代日本はお互いに魅力的で興味深く、両国の関係を深めることに価値がある」という認識を深めることであり、それに基づいてパートナーシップを築き上げていくことである。



日本銀行政策委員会審議委員
亀崎英敏

Hidetoshi Kanazaki

[かめざき・ひでとし]
1943年福岡県生まれ。1966年横浜国立大学経済学部卒業後、三菱商事(株)入社。1975年～1980年東ベルリン駐在員首席、1992年海外業務第二部長、1995年米欧業務部長、1996年企画業務部長、1998年米国三菱商事会社 E V P、2000年台湾三菱商事会社 社長、2001年三菱商事(株)執行役員、2002年代表取締役 常務執行役員、2005年代表取締役 副社長執行役員。2007年日本銀行政策委員会審議委員。



駐日ドイツ連邦共和国大使
ハンス・ヨアヒム・デア

Hans-Joachim Deert

1943年フランケンシュタイン(シレジア地方)生まれ。連邦海軍勤務を経て、チュービンゲン、ボン、ベルリンの各大学にて法学を専攻、チュービンゲン大学にて日本学を専攻後、1970年外務省入省。ECドイツ政府代表部を経て1973年～1976年在大阪神戸総領事館勤務。1979年～1983年 在日大使館と過去2回7年にわたる日本勤務を経験。その後、駐パキスタン大使などを経て、2006年7月1日から駐日大使。

グローバル化に伴って 変化する両国の若者の感覚

亀崎 デア大使は、一九七三年の初来日以来、今回で三度目の日本滞在になります。この三五年間の日本社会の変化をどう捉えていらっしゃるのでしょうか？

デア まず、大都市の景観の変化が大きいですね。都市圏が拡大し、高層ビルが増え、海岸線も変化しました。その反面、人々はあまり変わっていないのでホッとしています（笑）。

もともと若い人の感覚は変わっています。経済・環境・政治などのさまざまな面で世界は相互関係で成り立っているという認識が高まっていますから、日独両国の若い世代はグローバルな責務にうまく対処できるのではないのでしょうか。

亀崎 日本では大都市と地方の格差拡大が問題になっています。ドイツでは地方都市も活気や経済力があるように見えますが、違いはどこにあるのでしょうか。

デア 連邦制という制度の違いに加えて、歴史的な発展の違いによ

るものです。ドイツでは大小多くの国が乱立していた時期が長く、地方自治が発達していました。そのため、地域間の経済格差は当然で、その対処への経験を積んできたのです。現在では一六の州政府があります。経済力のある州から財政資金を移転させる憲法上のメカニズムがあります。

特徴的なのはドイツでは一〇万人規模の都市でもオペラや演劇等の鑑賞など文化的なバックグラウンドがあることです。日本同様に若い世代は地方から都会に移住しますが、比較的近くに魅力的な都市を見つけられます。

亀崎 グローバル化の進展に伴って、日本では終身雇用制の変化や、労働者約六四〇〇万人のうち一七〇〇万人が非正規雇用者といった労働市場の分断化が進んでいます。

デア 共通の動きとしては、若い世代で終身雇用への関心が薄れていることです。ただ、一般の人々は終身雇用の崩壊を憂慮しているのではないのでしょうか。長期的な雇用の不安定が、ひいては日独両国の出生率低下につながっていると思われれます。

「対話による変化」が 奏功したドイツ再統一

亀崎 ところで、ドイツの再統一と欧州統合の影響はどんなところで現れていますか。

デア 再統一によるインフラ整備事業は大規模で費用がかかりましたが、ほぼ完了しています。国民の意識で言えば、完全に一つになるには一世代はかかるでしょう。しかし、この面でも順調に進展しています。

歴史軸でみると、まず旧東西ドイツの成立、ドイツ全体の統一、EUへの統合という大きな流れがあります。文化・教育面では「単一欧州」は急速に実現しています。ドイツ人の欧州人意識も高まっています。もともとドイツ人は地球市民意識が強く、グローバルな責務を果たすことに関心があります。環境問題もその一つ。遠く離れた国々にも関心を寄せて責務を果たそうとしています。地球市民としての自発的な連帯感を持っているところが、ドイツ人の良いところではないのでしょうか。

亀崎 EU統合は強化されると思

いますか。

デア ドイツ人の大半は、究極的には一つの連邦政府がある欧州連邦国家になることを望んでいます。欧州憲法については今のところ頓挫していますが、欧州理事会で基本条約の合意が得られました。欧州統合構想にとっては大きな前進といえます。

亀崎 一九七五年から八〇年まで、三菱商事の東ベルリン駐在員首席としてベルリンに滞在していました。事務所は東ベルリン、住居は西ベルリンで、資本主義と共産主義の二つの異なる環境で毎日生活してきたわけです。分断国家ならではの悲劇もたくさんありました。ところが、一九八九年、あれほど堅固に思われたベルリンの壁が崩壊したのです。まさに不自然なことは続かないという教訓といえます。

デア ベルリンほど、国家の分裂、欧州全体の分裂をはっきりと象徴した場所はありませんでした。にもかかわらず、あれほど早く再統一が実現するとは、誰もが思っていないませんでした。当時の東西ドイツ政府のモットーは、「対立ではな

く対話による変化」でした。結果的には、このアプローチは成功だったのです。理論上は、旧東ドイツがもう一つの独立した民主主義国家になるという選択肢もありましたが、旧東ドイツの人たちが再統一を望んでいることが明らかになりました。

日独の似ている部分、似ていない部分

亀崎 ドイツ人と日本人とでは、かなりの共通点があるように思いますが……。

デア 両国が経済的成功を収めているのは、社会がよくまとまっており、規律正しく、勤勉で組織だっていること、自然とのつながりが強いこと、音楽を好むこと、感情豊かなことが挙げられるでしょう。私が強く感じるのは、両国民ともに他国が自分たちをどう見ているかに敏感だということです。

亀崎 西ベルリンに住んでいたころ感じたのは、家庭での子供の教育が厳しく、きちんとしてつけられているということです。ドイツ人が概して礼儀正しく、マナーがい

いのは、家庭でしつけられている賜物だと思いました。

デア ドイツでは、一、二歳といった小さいころから分別をつけないければならないと考える傾向があります。ドイツでは最近、厳格な教育から自由な教育へと転換してきましたが、この二つの傾向は交互にやってきました。

私の印象では、日本では知人とそれ以外の人間との間に明確な線引きをするように思われます。隣人や同僚にはとても礼儀正しい反面、見知らぬ人とは一定の距離を置く傾向が強いようです。二つの異なる次元があるように感じます。

亀崎 家庭教育と学校教育の関係はいかがですか。

デア ドイツでは、高校に入るまでの学校教育は朝八時〜午後一時までの半日で、昼食時には家に帰ります。家族と過ごす時間が長いのです。伝統的に親が子供たちのためにさまざまな活動を計画・実行してきました。しかし、最近では共働きの家庭が増えてきましたから、長期的には全日教育への移行が必要になってくるでしょう。

悲観的 vs 楽観的？ 日独のエネルギー対策

亀崎 ドイツは環境問題に特に注意を払っているように見受けられます。ハイリゲンダムサミットでは、二〇五〇年までに地球規模での温室効果ガス排出量を半減させることを真剣に検討するとの合意がなされました。安倍前首相とメルケル首相が、この合意に至る過程では主導的な役割を担いました。

デア もっと高い目標を設定したいと考えるEUと、米国や中国などの消極的な大国の仲立ちとして、日本は素晴らしい役割を果たしました。重要なのは、すべての参加国が同じ土俵に立ち、方向性を決め、国連の枠組みの基本的なメカニズムについて合意を得ることでした。確かに緩やかで不十分な合意でした。しかし、CO₂排出量の多い米国や中国、ロシアなどの参加がなければ、いくら積極的な目標を掲げても意味がないのです。

ところで、一〇〇〇米ドル相当のGDP生産に必要な石油類は、米国で二六〇トン、ドイツで一四〇トン、日本で一一〇トンです。

亀崎 中国は日本に比べるとエネルギー効率が約九分の一と聞いたことがあります。

デア ドイツや日本が一緒になって、他国を自分たちのレベルまで牽引していくことが地球温暖化を含めた環境問題に対する大きな貢献となります。ドイツや日本自身についても、課題が残る分野があります。日本は住宅の断熱効果が低く、ドイツはエネルギー効率の悪い高速道路でのスピード無制限を続けています。省エネ車については、日本はハイブリッド、ドイツはディーゼルと異なる技術に力を入れてきましたが、双方の取り組みが重要であり、将来的にはこれらを組み合わせることも考えられます。なお、エネルギー効率や省エネを比較する際には、製品のライフサイクル全般を対象としなければなりません。製造工程のみならず廃棄する際にもエネルギーを必要とするからです。

ドイツでは現在、風力、太陽光エネルギー、バイオマス、地熱エネルギーという再生可能なエネルギー利用が大きく進展しています。これらの四分野は競争力がない中、

ドイツ政府が未来を見据えて厚い補助金を出しているからです。日本はドイツよりもエネルギーの海外依存度が高く、政情不安定な中東地域から石油の八〇%以上を輸入しています。その分脆弱性^{せいじやく}があります。

ドイツ人が心配性で将来に対して悲観的なのに対して、日本人は楽観的で、問題があれば素早く反応して対応することが得意です。

亀崎 何事もフォワードルッキング（先見的）なスタンスが大事ですね。

デア 研究・技術開発面では日本人はとてもフォワードルッキングです。この面では地固めをしますが、代替エネルギーへの投資という面ではドイツに比べて環境に恵まれているにもかかわらず少ないのです。

例えば鮭とワイン。 新しい関係づくりを模索中

亀崎 ドイツと日本が関係をより深めるためには、どのようなことが必要だと思いますか。

デア 現実的には、ドイツと日本の関係の相対的な位置付けは幾分

低下してきていると思います。それを埋め合わせられるのは、パートナーシップ意識です。価値観を共有していますし、似たような関心を持っています。また、経済や科学面を含めて社会全体の発展度合いも同じ程度です。さらに長年にわたる友好関係があります。まさにうってつけのパートナーです。協調・協働を強化することで、世界的な平和維持、エネルギー・気候問題、災害予防などの国際的な分野で効果を上げられるでしょう。さらに、高齢化社会、移民の教育、職業訓練、グローバル化、環境問題……などの国内のさまざまな問題に対して、意見交換をし、助け合うことです。例えば、高齢化社会については、イノベーションによってどう経済成長を維持するか、といった点でパートナーシップの活用が可能になるでしょう。

亀崎 ドイツ、日本の両国は共通するバックグラウンドを持っていますから、共に取り組むことが可能です。ハイリゲンダムサミットが、いい例です。最近では、二〇〇五〜〇六年の「日本におけるドイツ年」や〇六年のサッカー・ド

イツワールドカップなどのイベントは、両国の交流を深めました。

デア 「日本におけるドイツ年」では、一二月で一六〇〇件弱という多くの行事が開催されました。これからは、東京ばかりでなく多くの地域との交流活動にさらに力を入れていきます。そして、若い世代への働きかけを強化し、彼らの興味や共感を、ライフスタイルのなかのさまざまな分野に広げていく必要があります。既に成功しているものもあります。サッカーがその一つ。ワールドカップによりドイツに興味を持つ若者が増えました。日本ではドイツ映画の人氣も返り咲いていますし、ドイツでは日本のアニメが大人気です。今では相撲の主な取り組みもドイツで見られます。ドイツの得意分野で日本人にあまり知られていないのが、若者のファッションです。ベルリンは今では現代ファッションの中心地の一つです。こうした現代ドイツのライフスタイルをもっと紹介していかねければなりませんね。

なお、最近では東京のほか各地でオクトーバーフェスト（ビール

祭り）が開催され、なかなかの盛況ぶりを見せています。ドイツワインも日本でのイメージを一新させようという取り組みが進んでいます。例えば、鮭とワインの組み合わせ。ドイツワインは繊細ですから鮭の味を引き立てます。

亀崎 大使ご夫妻とご一緒させていただいている「ドイツワインと鮭の夕べ」で、私もドイツワインと鮭が合うことを実感しています。

私も日本銀行は、一九五六年九月にフランクフルト事務所を開設するなど、ドイツの中央銀行にあたるブンデスバンクと深い親交関係にあります。ブンデスバンク設立五〇周年と同行東京事務所開設二〇周年（いずれも二〇〇七年）を一緒にお祝いすることができてうれしく思っています。また、フランクフルトに、ECB（欧州中央銀行）ができて絆はさらに深まっています。

今後は、ライフスタイル面を含めてドイツと日本は、新しい関係づくりを総合的に進めていかなければなりませんね。本日はどうもありがとうございました。